

千二小・三十回生 現・文芸春秋社長

平尾隆弘氏の横顔

編集部



千二小―吹田一中―茨木高校―神戸外大・英米学科を経て、文芸春秋入社。

平成7年「週刊文春」編集長、平成9年「文芸春秋」編集長、平成21年代表取締役社長就任

最近、私（萩原）は新聞に載る芥川賞受賞者や、画家の言葉の中に、「平尾文芸春秋社長」の名前をしばしば目にするようになりました。

そこで少し、氏のことを調べさせていただき、また、氏を知る方に人となりなどを伺いました。すると実際にユニークで素晴らしい人であることを知り、是非、同じ学び舎で過ごした皆さんにご紹介させていただきたい と思いました。

と同時に、将来、氏に時間的余裕が生じたならば、是非、千里山会の総会等にご出席願ひ、出版会の話しても聞かせていただけたら と願っております。

藤村修元官房長官に昨年の総会でスピーチしていただき、今後もずっと総会に出ていただけるようになったのと同じように。

ここで氏を「よいしょ」するつもりはありませんし、文芸春秋の宣伝を担うつもりもありません。

あくまでも氏を知る千里山の方々から、氏に纏わる楽しい思いで話など、ご披露していただきそれを皆様にご紹介出来れば と思つて企画しました。

平尾隆弘氏には、お兄さんと妹さんがおられ、皆さん、千里第二小学校ご卒業です。

お兄さん…平尾頼信氏（27回生） 岡山県在

元 辰巳物流㈱社長 現顧問

妹さん …大津光子さん（32回生） 東京都町田市在  
千里山会・会員

隆弘氏が文芸春秋編集長をされている時でしょうか、当時千里山会をお一人で切り盛りされていた柿崎さんが隆弘氏にコンタクトされたことがあります。だから今も名簿に隆弘氏の以前の住所が載っております。でもその時、氏は既にお忙しく、千里山会への入会は断られた と聞いております。今はさらにお忙しいのでは と推察されます。

週刊文春時代は、当時全盛期にあったオウム真理教の真相解明に当たられ、嫌がらせや時に危険な目にも会われた とご本人からではないものの、聞いたことがあります。

そのようなことがあつたため、現在千里山会の名簿に載る住所は以前そのまま変更しておりません。

## 氏の横顔

### \* 森繁久弥と映画で共演

谷崎潤一郎の 「猫と庄造とふたりのをんな」の一シーン

平尾氏…「オッサン、何探しとんねん？」

森繁氏…「ネコ探しとるんや」

平尾氏…「オッサン、あほちゃうか」

氏は小学校時代、NHK大阪の児童劇団に所属。映画のキャストに名前も出たそうです。庄造が猫を捜しに空き地にやってくる。そこに氏がいて、先のセリフのやりとり。

映画の舞台は芦屋の浜。でも空き地のシーンは東京の撮影所で撮影。まだ新幹線のない時代、小学生の氏はお祖母ちゃんに連れられて急行列車で10時間近くかかったそうです。東京の撮影では、立ち小便するシーンがあり、カメラが回りだしてうまくオシッコがでるかどうか心配だったそうです。お茶をたくさん飲まされていたので無事に出てホットされたそうです。

\* 読書好き・学級新聞作りに精

子どもの頃から本が好きで、先のNHK児童劇団に通う途中、電車の中ではいつも本を読んでもらったそうです。本は講談社の「世界名作全集」や貸本屋で借りた伝記もの、小説、漫画他いろいろ。また、小学校時代は新聞作りに精を出し、自分でガリ版刷りの学級新聞をクラスの皆に配ったそうです。

高校時代は卓球部に入り、同人雑誌を作り、小説やエッセイ風のを皆に書いてもらい、やはりガリ版で手書きし、刷り上がったものを皆に売っていたそうです。

将来を彷彿させるものですね。

\* 神戸外大を選んだ理由の一つ。

好きな女の子の姉さんと同じ学校へ行きたかったから

\* 大学生生活

学生時代は学業よりも山登りに熱中。ワンダーホーゲル部に入り、25〜26人の部員と楽しく

「我社に誰か知り合いが居れば受験できます」  
平尾氏はすかさず

「私は今、貴女と知り合った。紹介者になって下さい」とお願いされたそうです。

結局、彼女は別の男性を連れて来て、その方が身元引受人になってくれ、無事、入社試験―入社に漕ぎ付かれたそうです。

《普通は指定校の話が出た時点で諦めるでしょう。頭のいい人は見極めが早いから。僕は秀才じゃあないから諦めず、ダメモトで頑張った》  
とは氏の言葉。

それにしても採用担当の女性は表彰ものですね。

\* 入社後

《入社後、自分の力量不足に自分で嫌になり、それが会社への違和感を増殖。何か表現したいと考えて、「宮沢賢治」と言う本を国文社から出版。

違和感が無くなったのは30代半ばからで、私は仕事も職業も何度も何度も選び直すものだ

大学生を送られ、今も親しくお付き合いを続けておられるそうです。

学校全体の雰囲気はとてもよく、神戸外大に入って本当によかったと言われています。

\* 就職活動

《希望の就職先は出版社しかなかったが、大学の就職相談では、出版社は無理とのこと。旅行社の大手2社から内定をもらい、気分が楽になり、履歴書をたくさん作って上京。ワンダーホーゲル部の先輩宅に居候し、出版社に挑戦。

しかしコネとてなく、採用試験を受けるころまで行けず難航している中に、文芸春秋社にたどり着いた》とは氏の言葉。

採用担当の女性から

「当社は指定校制だから神戸外大はダメです」と極めて冷静な対応。でもそれぐらいで諦める氏ではなく

「私は真剣に貴社に入りたい。それなのにチャンスを与えないのはフェアじゃない」と粘ると、次に彼女は

思う。「天職」などはないと思う。世襲制の仕事でもどこかで選び直して『天職』にするんじゃないかな。

だいたい子役で挫折する人が多いのは、思春期に職業を納得して選び直さなかったから。経験者としてそのように思うし、出版社志望者としても好きなだけではダメで、やはり自分の中で仕事を運び直したのだと思う》と言われています。

\* さっかなる飛躍

クレア編集長、週刊文春編集長、文芸春秋編集長を歴任されました。

《クレアは初めての女性週刊誌で楽しかった。

週間文春では、地下鉄サリン・オウム事件

文芸春秋では、少年A酒鬼薔薇聖斗事件に遭遇

「少年A検事調書」全文掲載

上層部からは強い反対意見も

『もし掲載が事前に知れたら出版差し止めになる可能性もある』と言われた。私自身、絶対に掲載したいので責任も引き受けるつもりだったが、神経を使った。以前から親しかった立花隆

氏に相談。検事調書掲載の意見を書いてもらった」と語られています。代表取締役社長に就任され、その後、日本文学振興会の理事長、芥川賞選考の最高責任者にもつかれています。

### \* 趣味

山登り。日本百名山の半分近く登っておられ、最近、年に一度、元ワンダーホーゲル部の友達と一緒に、登山と、温泉に行かれるくらいで、リタイアしたら余裕を持って行きたいと言われています。

ゴルフはされず、とにかく歩くのが好き。糖尿病治療も兼ねてそこから中を歩かれています。現在のお住まいは世田谷で、駒沢公園はよく歩かれています。お子さんは3人だそうです。

### \* 平尾氏の一言

出版社はオーナー会社が多い中で、弊社はそのではなく、歴代、サラリーマン社長。だから「とうとう社長になったぞ」みたいな感じは本人

はもとより、社員にも全然ないと思う。強いて言えば、「総責任者」で、全てを引き受ける心積りがあるだけ。自分がいないと会社が困るといのは大きな間違いで、そういう体制を作るヒトはダメなんです。私は自分がいなくても会社が利益を上げて、スムーズに事が運ばれるような仕組みを作るのが目標である。

「一刻も早くいなくなれ」と思われるのも嫌だが。

氏が社長に就任されて既に4年が経ちます。文芸春秋には新しいものがない。読者層も高齢者が主体。老齢化の世の中で、今後、若者層を引き込むことができるか。との危惧にも、樂觀はしていないが、悲観的でもない。と明快。さらに続いて氏の言葉を借りれば

「高齢者というから先がないような気がするが、「大人」が支持するメディアは必要。「新しい」という言葉は諸刃の刃。「新しい」だけでは、雑誌も書籍も、巷に溢れかえっている情報に及ばない。出版社の役割は、情報を整理、あるいは「問題提起」の形で、本当に大切な情報の意味を提起することにある。」

もう一つ、書き手の方たちを支えながら、主として文芸の魅力である「物語」の力を世に送り出す役割もある。「編集力」というのは、その場で創意工夫する力を指している。それはエディターに限らず、社業の全ての部署に必要で、社員みんなが「編集力」に自覚的であって欲しい。要するに「編集力」が健全である限り、文芸春秋は大丈夫ということである」と結ばれています。

### 千二小時代の恩師 小山健一先生のコメント

\* 彼は、千里第二小学校の校区ではなく、吹田第二小学校の校区から通学していました。当時は、現在のように厳密な学区制ではなかったもので、彼だけではなく、遠く「淡路」や「天神橋商店街」から、環境の良い千里第二小学校へ通ってくる児童が少なからずありました。首から定期券をぶら下げて、電車通学する児童が居たことを思い出します。

\* 詳細な家庭環境は解りませんが、彼は「おばあち

やん子」のようで、おばあちゃんに可愛がられ、学校行事などにも、よくおばあちゃんが、母親代わりにお見えになっていました。先生方からも、平尾君のおばあちゃんと呼ばれ、顔見知りが多かったようです。

\* 色白の可愛い男の子でした。学習成績もいつもトップクラスで、科目にムラがありませんでした。強いてあげるならば、体育が、少し苦手だったようです。

\* 小学校時代から演劇には興味があったようで、私が担任をした4年生の頃だったでしょうか、「婆やたずねて」という、私の書いた脚本の劇を、当時、NHK主催の学校劇コンクールに応募。出演して貰った記憶があります。(お芝居の好きな、高松さんという女兒も一緒だったように記憶しています。結果は、台本が拙くて見事落選。名優も台無しでしたね)

小山先生、有難うございました。